特集
選挙の風景

緊張のなかの多幸感
―二〇一五年ミャンマー総選挙瞥見―

長田 紀之

国民民主連盟（ＮＬＤ）の本部前に集って歓喜する人々の姿。雨季の終わりの雨に打たれながらの群衆の喝采。みなぎる興奮。これは二〇一五年一一月のミャンマー総選挙について、選挙後に流通したひとつの「風景」である（写真①）。たしかに、こうした「風景」は象徴的な場所での決定的な瞬間を切り取った「画になる画」であり、強い訴求力をもつために多くのメディアによって生産され、世界中の人々に消費された。

写真①　投票翌日、NLD 本部前の支持者たち
（筆者撮影、2015 年 11 月 9 日）

とはいえ、異なる視点から眺めるならば、我々の目に映る「風景」もまた違ったものとなりうる。この小文では、前記の現場に居合わせた筆者なりの「風景」を述べてみようと思う。ただ、ここで述べることは短いヤンゴン滞在に基づく単なる印象論に過ぎない。二〇一五年総選挙の詳細については参考文献に挙げた近刊予定の書籍を参照していただきたい。

●普通の選挙の珍しさ

二〇一五年のミャンマー総選挙は、現体制下で行われた最初の総選挙であるが、現行の二〇〇八年憲法に基づく総選挙としては二度目となる。

前回の二〇一〇年総選挙は軍事政権下で実施されたものだった。二〇一〇年総選挙の結果は、軍政の大衆動員組織が衣替えをした連邦団結発展党（ＵＳＤＰ）の大勝であった。軍服を脱いで出馬・当選した元軍政序列第四位のテインセインＵＳＤＰ党首が大統領に就任して、二〇一一年三月から五年間の政権を担うことになった。

二〇一〇年の選挙結果は民意を反映したものとは言い難かった。その最大の理由は、民主化運動の象徴アウンサンスーチー氏が率い、国民の多くの支持を集めるＮＬＤが、軍政が作成した二〇〇八年憲法の正統性を問題視して選挙に参加しなかったからである。対照的に、二〇一五年選挙はＮＬＤが選挙議席の約八割を獲得する圧勝をおさめ、おおむね自由で公正な選挙であったとの評価を得た。

民意の反映される自由で公正な選挙ということでいえば、二〇一五年選挙は一九九〇年以来四半世紀ぶりの選挙であった。一九八八年の民主化運動とネーウィン体制終焉の後に実施された一九九〇年選挙では、この民主化運動の過程で結成されたＮＬＤが国民の圧倒的多数の支持を得る結果となった。しかし、この選挙結果に基づく政権の移譲が行われることはなかった。暫定的な治安維持政権を担っていたはずの国軍が政権の座に居座り続けたためである。民意が選挙結果に反映され、かつ、それが国政に反映された選挙となると、一九六〇年以来、実に約半世紀ぶりである。その一九六〇年選挙で成立した政府も、わずか二年後に国軍によるクーデタによってあえなく命脈を絶たれた。

このようにミャンマーでは、長い間、普通に選挙が実施されることすらなかったのである。国民の二〇一五年総選挙への期待は非常に大きく、それだけ選挙が再び台無しにされることへの不安も大きかったように思われる。

●仕組みと作法

現行憲法下で五年に一度実施される総選挙では、国政レベルである連邦議会の上下両院の民選議員と地方レベルの管区域・州議会の民選議員が一斉に改選される。民選議員というのは各議会の全議席の四分の三を占めており、残りの四分の一は選挙によらず国軍最高司令官が指名する軍人議員である。二〇〇八年憲法にはこのような国軍の国政への影響力を担保する規定が随所に書き込まれている。議会により選挙区割りが異なるものの、いずれも選挙制度は単純小選挙区制である。選挙権は基本的に一八歳以上の国民に認められている。被選挙権の下限年齢は議会により異なり、上院で三〇歳、下院と地方議会で二五歳となっている。

一回の選挙で、有権者は上下両院と地方議会の議員を選ぶために三度投票することになる。ただし、有権者が少数民族に帰属していると、地方議会の民族代表議員の選挙も含めて四度投票する場合がある。一度の投票について一枚の投票用紙が渡される。投票用紙にはその選挙区の候補者たちの名前と政党のロゴが印刷されており、選んだ候補者の政党ロゴの隣の空欄に選挙管理委員会のハンコを押して投票する。投票を済ませた後には、小指を墨壺につけて染めてから投票所を出る。同じ有権者が二重に投票することを避けるための措置である。

●投票日のヤンゴン

投票当日、ヤンゴンは静かであった。いつもは渋滞する道路も車がほとんど通っておらずに空いている。投票所には夜明け前から人々が集まっており、投票開始の朝六時にはすでに整然とした長蛇の列ができていた（写真②）。政権交替への期待を胸に列に並んでいた人も多かったであろうが、あたりにはうっすらと緊張感が漂っていた。投票日の前日は、各政党の選挙活動が禁止されていたが、テレビの国営放送では投票を呼びかける番組が放送されていた。投票方法について説明する映像とともに流れていたのは、中東の紛争とミャンマーの平和と発展を対比的に描写する映像である（写真③）。前者の映像は、流れる血をモチーフとしたおどろおどろしいフレームのなかで流され、後者はテインセイン政権によって成し遂げられた業績として描かれた。あからさまにＵＳＤＰへの投票を促した映像であり、ＵＳＤＰを選ばなければミャンマーは紛争と貧困の悲劇に陥るだろうという脅迫ととれなくもない。政権側のこうした態度が、選挙当日の有権者たちに一定の緊張を強いていたとはいえないだろうか。

写真②　投票日、早朝から並ぶ有権者（筆者撮影、2015 年 11 月 8 日）

投票は午後四時に締め切られた。その後、開票と集計がすすんでいくなかで、次第にＮＬＤの大勝が明らかになってくる。ＮＬＤはヤンゴンの党本部の前に大型のスクリーンを設置し、独自の集計結果を発表した。多くの支持者が本部前に集まり、ＮＬＤ優勢の報が映し出されるたび歓声が上がった。こうした状況は翌日のアウンサンスーチー氏の演説を頂点として数日間続いた。冒頭で述べた「風景」もその一齣（ひとこま）である。しかし、この興奮と熱狂はＮＬＤ本部前に限られたものであり、「何が起こるか分からない」と家のなかでじっとしていることを選んだ人も少なくなかった。とはいえ、多くの人にとってＮＬＤの勝利が朗報であったことは間違いない。ヤンゴンを見渡したときにみえるのは、抑制のとれた静かな多幸感が町全体を包んでいるかのような「風景」であった。

写真③　投票前日の国営放送。血のフレームと中東紛争（筆者撮影、2015 年 11 月 7 日）

（おさだ　のりゆき／アジア経済研究所　動向分析研究グループ）

《参考文献》

①長田紀之・中西嘉宏・工藤年博『ミャンマー二〇一五年総選挙――アウンサンスーチー新政権はいかに誕生したのか――』アジア経済研究所、近刊。